

えん 円 宗 寺 跡

調査期間： 令和4年11月28日(月)
～ 12月28日(水)

調査機関：京都市 文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

調査地は右京区御室小松野町18-6ほかの所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「円宗寺跡」にあたります(図1)。ここに個人住宅建設が計画されました。

計画に先立つ宅地造成時に実施した試掘調査により、平安時代の遺構を確認していたことから、発掘調査を実施しました。発掘調査は令和4年11月28日～12月28日まで、作業日数は延べ20日、面積は80㎡です。

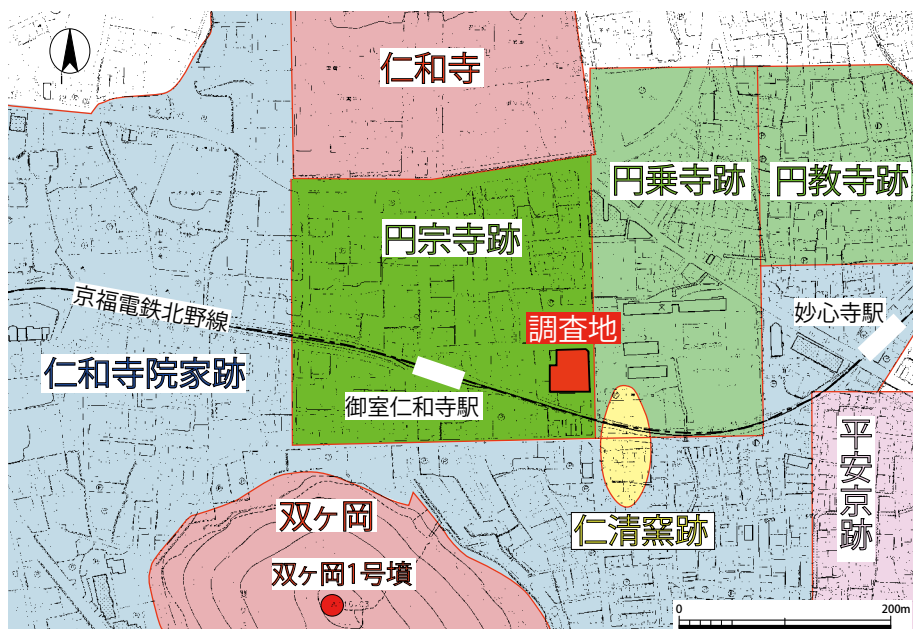


図1 調査地周辺地図

※各遺跡の所在地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の位置による。



2 円宗寺とは

仁和4年(888)、宇多天皇の御願により、仁和寺が建立されました。これを期に、仁和寺の南側を中心に、「院家」と呼ばれる寺院が建ち並ぶようになります(仁和寺院家跡)。最大で70箇所以上建ち並んだ院家ですが、その中には天皇の御願により建立されたものがあります。これらはいずれも名前の頭に「円」の字が使われており、4箇所あったこれらはまとめて「四円寺」と呼ばれています。

円宗寺は、後三条天皇の御願により、延久2年(1070)に建立されました。四円寺の中で最後に建てられ、最大の規模を誇ったと伝わります。円宗寺は国家的な宗教儀礼が複数回行われるなど、大寺院として複数の史料に名が残ります。しかし鎌倉時代以降衰退の一途を辿り、応安2年(1369)に大風で倒壊した後、復興することなく廃絶しました。今ではその正確な所在地すらわからなくなっています。

史料に遺されたわずかな記録から、故地を推定する試みはされていますが、考古学的な調査が進展していないこともあり、その実態は謎に包まれています。



3 今回の発掘調査成果

今回の調査では、平安時代の整地層と、江戸時代に埋没した溝状遺構などを確認しました。

平安時代の整地層は、調査区の部分的な範囲での確認に留まりました。しかし、層内からは平安時代の土師器片が出土しており、円宗寺造営時に施されたものの可能性があります。

調査区の中央では、東西方向に延びる大きな溝状遺構を確認しました。東で北に約5度振れるこの溝状遺構は、南北幅2.6m、東西長5.4m以上、深さ0.3～0.6mを測ります。

この溝の埋土からは、江戸時代の遺物と共に平安時代の瓦が多量に出土しました。出土した瓦を観察すると、その文様や仕上げの痕跡から、複数の産地で生産されたものがあることがわかりました。これらの中には、大和や播磨など、

平安京とは少し離れた地域で生産されたと考えられるものも含まれます。大量の瓦の存在や、複数の産地から搬入されているような状況は、この付近に瓦を用いる建物が存在し、それが大規模なものであったことを示します。平安時代には庶民の住居などに瓦を用いるのは一般的ではないため、円宗寺に関連したものと考えられるでしょう。

今回の調査は、円宗寺が建立された時期に施されたと思われる整地層を確認したことと、円宗寺のものと思われる大量の瓦が出土したことが成果と言えます。これまで実態が謎に包まれていた円宗寺ですが、発掘調査などにより、少しずつその姿を現しつつあります。今後、さらなる調査の進展が期待されます。

(佐藤 拓)



図2 検出状況（東から）



図3 平安時代の瓦出土状況



図4 出土瓦